
透明人間の足音

永矢龍樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

透明人間の足音

【Nコード】

N6852Y

【作者名】

永矢龍樹

【あらすじ】

天才な俺、土御門翔はある日、運命の女性に出会った。
その名も「不知火・M・奈菜」
通称”透明人間”

人を信じられない天才と歩く不思議ちゃんが繰り広げられる学園純愛コメディライフ！？

prologue

運動神経抜群、成績優秀な俺が恋した相手はなんと透明人間だった！？

人を信じられず、自らの殻にこもり仮面優等生を演じる天才と人に認識されずに悲しい過去を背負う内気な女子高生の間に繰り広げられる学園純愛コメディーライフ！？

出会ったその日から天才は透明人間を”人”に変える事ができるのか？

そして、天才は仮面を捨て、人になることができるのか？

乞うご期待！！

みたいなものを書く予定。

ですが、初めてなので助言お待ちしています。

第一章

俺の名前は土御門翔。つちみかどしろう自分で言うのはなんだか天才だ。運動神経もいいし、成績も優秀。

そして、周りは馬鹿ばかり。

俺は周りの”人”に興味がなかった。だってそうだろう？そもそも
の出来が違うのに何故なれ合う必要がある。

だが、俺は生徒会長を勤めている。
なぜかって？

そんなのは簡単だ。周りにやらせるより自分でした方が断然楽だからだ。

正直、俺はだいたいのは事是可以。

教師達のする仕事なら説明無しにだってやり遂げることは簡単なことだ。

周りはそんな俺を優等生か何かと思っているらしい。だから、俺もそれにつきあっているだけだ。

俺にはそんな毎日が続いていた。

すべての授業が終わり、俺はいつものように生徒会室にむかった。
教室を出て職員室の前を通ると不意に後ろから呼び声がした。

「土御門、ちょっといいか？」

声の主は角屋拓三。クラス担任だ。そいつはこちらが答える前に話を進めた。

「ちょっと、この資料を特別教室に運んでくれないか？」

「はい、かまいませんよ」

嫌がったら後で面倒なので、とりあえず笑顔で引き受けた。

その後、俺は資料がたくさん入ったダンボールを持ち上げ、特別教室へ向かった。

廊下は静かで聞こえてくるのは部活動で汗を流す連中の声だけだった。

そんなやつらを何も感じずに見ながら歩いていると、気づいた時には自分は特別教室の前にいた。

「思ったより近いな」

俺はゆっくりとドアを開けた。

・・・俺はそこで人生初めての衝撃に出会った。

俺は、今まで信じたことのない運命を信じてもいいと思った。

俺は生まれて初めて・・・恋をしたんだ。

第二章

「俺と付き合ってくれ」

放課後の特別教室に響いた恥ずかしいぐらいのまっすぐな告白。それは俺の第一声だった。

「・・・・・・は？」

彼女は顔をゆがました。そんな顔も優雅で、目を離すことができない。

「・・・・・・誰ですか、あなた」

「あ、名乗ってなかったね！土御門翔っていうのだけど、知らない？一応、生徒会長してるんだけど」

「知らない。興味ない」

「なら、覚えてくれ。そんなことより君の名前は」

「・・・・・・不知火・M・奈菜」

彼女は下にうつむきながらつぶやく。あれか？人見知りってやつか！かわいいな。そんな姿も天使のように見えるのは恋の力ってやつか。あはは。

「あなたは・・・・私に何のよう？」

彼女は不思議そうな目でこちらを見つめた。

何の用ってあんなにはつきり言ったのに聞こえていなかったのか。

俺は最初の発したセリフを再び口に出そうとした。が・・・

「あ、会長くんだ！」

「お、ラッキー」

邪魔が入った。

こいつらは本当に神経どうにかしているのではないか？
いつも、いつもいらないことだけしてくれる。だが、それを顔に出しては今までの俺の努力が水のアワだ。

「どうしたのですか、先輩」

その一言でキヤーキヤー言い始める自称先輩方々。

一年も早く生まれたくせに何をしていたのだ、こいつらは。
嫌気がさし、顔を不知火さんの方に向けると彼女はそこにもういなかった。

「どうしたの？翔くん」

「いえ、さっきまでここにいた女の子はどこにいったかと思いましたが」

「ええ、誰もいなかったよ」

誰もいなかった？そんな馬鹿な事があるか。彼女はついさっきまでそこにいた。こいつらにうんざりして姿をけしてしまったのか。
とりあえず、生徒会の仕事があるので、といって先輩たちとわかれた。

名前は聞いたんだ。クラスを調べれば明日会える。そんなウキウキな気分です徒会室にスキップしながらむかった。

翌日、あんな事態になるとは少なくとも俺は思っていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6852y/>

透明人間の足音

2011年12月17日22時00分発行